

(第3種郵便物認可)

2014年(平成26年)1月17日(金曜日)

進藤体制で競争力強化

新日鉄住金 指揮系統一本化

国内鉄鋼大手の新日鉄住金は16日、友野宏社長(68)が4月1日付で代表権のある副会長となり、後任の社長に進藤孝生副社長(64)が昇格する人事を発表

した。進藤氏に権限を集中させて、経営のスピード感を上げ、世界市場での競争を勝ち抜くのが狙いだ。「海外事業を推進するウハウは、他業種の会社と

比べると非常に少ない。不足している」。進藤氏は16日の記者会見で、危機感をあらわにした。2012年10月に旧新日本製鉄と旧住友金属工業が

合併した新日鉄住金は、旧新日鉄の宗岡正二社長が会長兼最高経営責任者(CEO)、旧住金の友野社長が社長兼最高執行責任者(COO)となるトップ体制を敷いた。合併がうまく進むように、規模の小さい住金にも配慮したためだ。1年余りが過ぎて合併作業が一段落し、旧新日鉄出身の進藤氏が友野、宗岡両氏の職務を一手に担う体制に切り替える。

背景には、世界首位のアルセロール・ミタル(ルクセンブルク)などとの競争がますます激しくなっていることがある。旧新日鉄は1997年まで粗鋼生産量で世界首位を守ってきた。しかし、アルセロール・ミタルが欧米の鉄鋼大手などの企業買収を進めたことで、2012年はアルセロール・ミタル(9360万ト)に大きく引き離された2位(4790万ト)に甘んじている。さらに、韓国や台湾の大手が、アジア諸国で高炉建設を進め、新興国市場の取り込みに力を入れている。



チームワーク第一



新日鉄住金次期社長
進藤 孝生氏 64

秋田高校でラグビー全国大会の「花園」に2回出場、4強入りを果たした。ポジションは要のナンバー8。仲間同士の支え合いと、チームへの貢献を大切にしているラグビー精神が「骨の髄まで染み込んでいる」(宗岡正二会長)。誠実な人柄で信頼を集める。宗岡会長から打診を受けたのは、昨年12月20日の夕方。主に総務畑を歩み、「丁々発止の交渉をした経験はない

し、技術も分からないことだらけ」と悩み抜いたが、「社員のを引き出すことが自分の務め」と覚悟を決め、クリスマスイブの24日に就任の意思を伝えた。

経団連会長などを輩出してきた名門企業。「自分の会社だけでなく、日本経済を元気にすることを忘れない」と意気込んだ。

新日本製鉄と住友金属工業の統合で誕生した新会社では、製鉄所の統合や交流人事などを主導した。共に歴史の古い新日鉄八幡製鉄所と住金小倉製鉄所の統合では、統合後の名称を巡って議論が紛糾する中、「大きい方に統一する」と明確な方針を決めて説明に駆け回り、OBらの了解を取り付けた。

進藤氏は記者会見で「技術、コスト、グローバル対応の三つを追求したい」と抱負を語ったが、海外展開の遅れ以外にも課題は少なくない。日本国内で高炉が8か所に分散し、一段の効率化が必要だとの指摘がある。中国や韓国のメーカーが、新日鉄住金の得意とする高品質な製品を造る技術でも追い上げてきている。